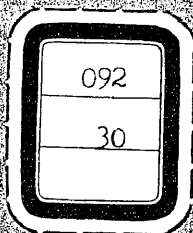
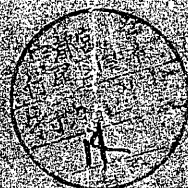


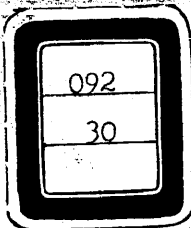
日光山志

四



N 14





建部孝  
吉之記

日光山志卷之四

目録

華嚴院 日圓

巫女石

中禪寺別所

古鐘銘

大音石

三層塔

中禪寺院北湖水圖

拜殿

唐銅石居

岩燕園

牛石

什物古磬 日圓

中禪寺古棟札寫

護摩堂

棟枕護摩所

本地觀音堂

石焼籠

冠木門

男衾山禪頂小屋

不斷火

老犬墨額像

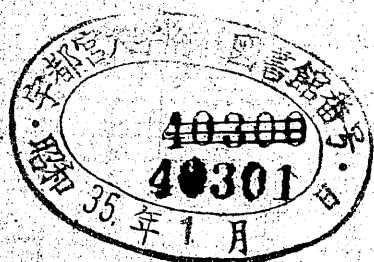
鐘櫓

古釜

三社權現本社

本堂

本戸門





松福頂

弘法大師記文

慈悲心圖

勝道上人之神教白と物（一）圖

如宝山圖

昇溪

日橋古田跡

子多系

赤岩

沈獄茶屋

鈴山

法華密嚴寺田跡

茶花教種

中祿寺私記

要羅樹

有湖

寺崎

上野橋

子多砂利

瑞瑞壺

本又寺田跡

鈴石

鈴石

持法橋古田跡

古碑銘

武村系

男新山（並古）

男新山（並古）

有湖

石楠花園

子多崎

葛蒲沼

龍頭龍日圖 其二

顯釋坊跡

四條寺田跡

般若寺田跡

梵字岩

標芽系 並古

白粉

葵湖

佛朗

中祿寺温泉（田）

赤白根山

肉菰蓉園

同祿寺岩茸系圖

巨尾崎

巨尾山中洞と砂石と砂達と圖

不動沢

若松崎

戰場系坑

野場池

竹菰池

須沼

湯平

赤白根山

白根葵園

所々温泉（板）

巨尾山（十）

巨尾山（十）

銀山

老松崎

赤沼系圖 其二

西池

魔池

湯池

金精崎

白根山圖

栗山（十）

所々温泉（板）

羽山隘觸

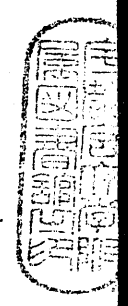
山中洞堀圖

庚申山圖

日光法石名産  
合石 飛石 魚石 茶石 穀石  
毛穀 伏穀 穀石 穀石 穀石

日光山志卷之四

植田孟縉編輯



華嚴瀧 此瀧瀑を中津寺湖水より落来る水路九七八町流れて  
はよりなる水路を又一派乃河の如く幅十間餘或を七八間の所  
も有り佐南瀧より田代町流れて来る板橋を架せり是を南津橋  
と唱ふ長十間餘其の橋を秋演の西詰あり又を足尾へ掛り上州  
筋より流るる其の足尾峠乃頂上より岐路を廻ると九二里餘の嶮  
と凌て爰へ来るまじき道と經る中津寺に流るるのを大平の道根  
かたへ折る行へる平坦の小路あり九六六町餘とたゞ里ゆきて此  
飛瀑の處なるを大谷川の水源なりと云ふ七十八丈といふは瀑を  
東園寺一の瀑といふ瀧に幅二間餘瀧下を人遊乃かよふ所なり



華嚴龍



華嚴瀑布圖  
王冕寫



こゝろの急瀬と眺むべき所あり急瀬より二三十間程も東寄の  
懸崖に危岨なる危岩あり葎を掴み急瀬の上より葎を力  
み掴み急瀬を延ながる飛流する水勢と規見るをより直下する  
激勢遙々下る水烟を雲盤渦とくく分ちがく葎岩と名附る  
縁記より此山中有瀑則湖水流派青巒高從紅日早照清瀧近遠岩  
上繁花芬々恰如涵錦似嚴瀧因名華嚴瀑云 此華嚴瀑あるゆゑ  
又源沢の方等滝般若瀧の名を記する歟

冠木門 中禪寺境内入口なりけ門乃名紙合門とも稱すと云ふ

巫女石 葎岩瀧の下の路傍あり其がら巫女の立ふ顔あり石  
と化したるいれを巫女ハ神ハ侍ふるものなれどあはれ牛馬女人

禁乃の地へ参りたるゆゑ神罰と罰を忽に立ふとて石と化しと云傳ふ  
牛石 冠木門より路傍あり牛の卧する顔ハ似たり七尺六寸

は六尺許齊の言き而三尺程毛も巫女石の如く牛を禁乃の地  
よへ牽来するの忽は四尺すくく石となれる由鼻と覺へき宛  
有而一藤りて繋ぐる顔ハなり

男禪山禪頂小屋 毎年七月朔日より同七日朝に禪頂する行人數

千餘山一け小屋に籠り居て種々行法を修く中禪寺上人とく

元法乃内より年番に當る僧先達七日乃早朝より登山を

七月朔日此所を登れる以恭四十八日別火一垢離をとり日行

する事終てけ所へ参るとなり初日より七日を宿ハ

市門より方より下る家といふ小屋數九二十棟毎區別一番附る

く入格番を有て湖あり色より参居乃最後或は別所の傍へ移り

小敷をせり

中禪寺別所 之を塔乃東寄より弘法大師の祀文を考るに勝道上人



岩燕

華嚴瀑の峻谷に巢ひ常に竅間を  
回翔するの燕より羽大くして尾  
ニツカさけ尾先小針の如きものなり

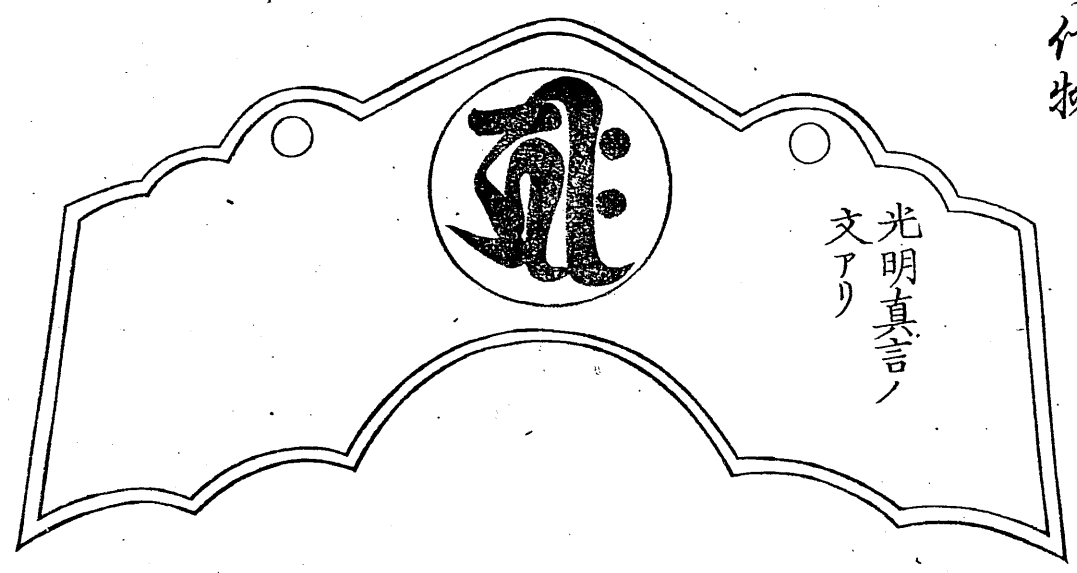


無事菴主君夏寫

延暦七年四月廿二日、山寺に火を起し、燬庵を焼く。山の麓に移すとある。其時上人  
 泰と閑を又補陀洛山神宮と号せし。一字の端ありといふ。其比より中  
 禪寺の称号に起せりといふ。建神宮精舎、號中禪寺と云く。又より一山乃  
 上人職のりあり。多限あり。山麓にて寺勢を司じ、かど寛永二年の  
 是より、是より清本院の清持とある。由今も一山平院の内務あり。其  
 一坊を人清本坊の内家来を人宛住番に於て下於一兩人住り。又  
 一坊の内より演説といふ。六七年替ふ。勤る由。又清宮乃社家。是も多福乃  
 次第と云く。二社権現の社勢司るといふ。  
 不斷火 由別所より八間、關に束火を絶す。となく、庫裡の火居煙裏乃  
 中へ木材をふけ、盡て夏絶する。由、表土人より、社代より、の火あり。と  
 以つて日光山内と初め町々乃、家にも、元初爰乃火を絶て、各々家にも  
 絶ふ。或やうに取計か、去風ありといふ。

中禪寺別所什物

磬の圖



光明真言ノ  
文アリ

奉施入  
 男躰權現  
 建保五年丁  
 金剛佛子  
 淨智房  
 献宣生年  
 六十三  
 大工藤原  
 兼則



古鐘の銘

此古鐘を文化八年丙丁の災に罹りけるが由翌九年奉命新鐘と銘する時此古鐘を載て前大僧正凌雲沙門尚珍と銘せり其銘文茲に略す

日光山權現御宝前 奉施入鑄金一口事

右志者爲左衛門尉藤原政綱北方藤原氏并所生愛子等御息災延命恒受快樂心中所念決定成就也

建保三年

丙子三月廿二日

願主左衛門尉藤原政綱

當上人覺音房

中禪寺古棟札寫

人王八十四代  
順德天皇御宇

藤原國綱妻子  
景綱入道妻子

奉建立一間二面御殿一字

征夷大將軍  
源實朝公御代

宗綱入道妻子  
親綱入道妻子  
藤原有房妻子

建保五年丁丑四月十八日

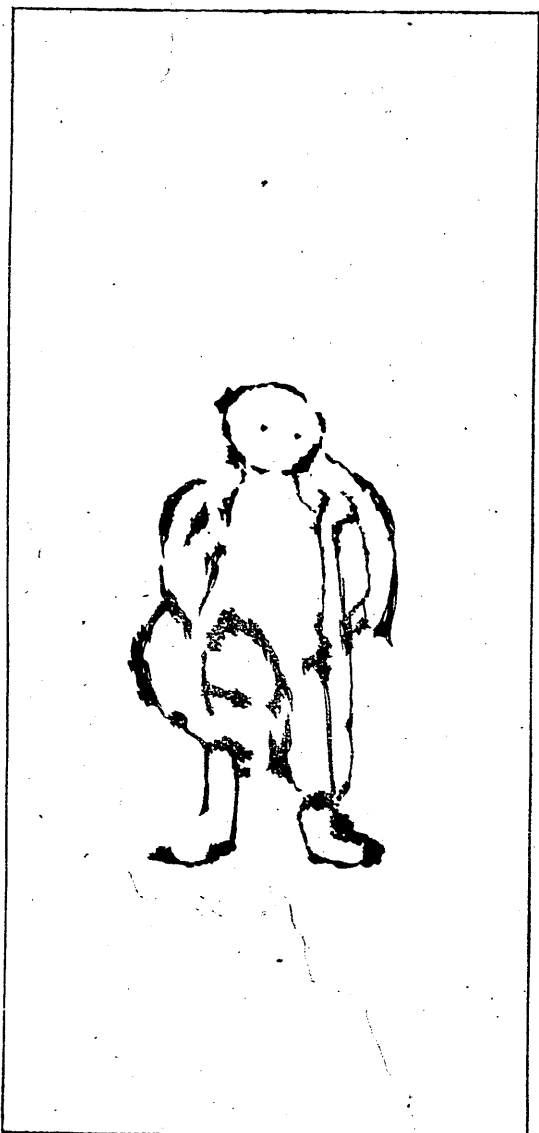
同 六年戊寅七月十九日

鎮守之地頭

結縁衆左衛門尉藤原朝政

古棟札保延久壽永曆文治建久等より後にも造営の毎事数多ありゆゑ悉く記しがつりて略す

中禪寺走大黒影像



走大黒影像 此靈像の来由を尋る小姓首城華坊と稱する衆徒中  
 得ちの上人あり一時毎春秋に互に何方よりとを初選定一丈乃  
 崩栗稗の種をくわへて來り別所を就むかる人坑壺き山中に栗稗  
 の為へき事ありと上人不思議と思ふ是被龍の足ふ糸を付くま  
 跡と慕ひ山の麓に互にそれる人家ありくまを依りま地と中禪寺

の社領とす是に系成付て見わたりたる所由也又より足尾にとを  
 名付しとわや上人判事是乃思をきと蒙て大黒天とを祀ひ  
 有るより大黒天を十二支の子とを望るふ被ありとぞ亦不思議  
 あるゆゑ被龍の形相自然に化し大黒天乃尊容を現せりま  
 像をるふ乃のち有る時乃上人あまを被之利大黒天と稱す  
 有る蒙候するもの下龍をくまを寄揚るゆ揚てかまふべの  
 らにをるといふ迷に迷ひ我れりも亦假字に被之利と書ゆ  
 別は秘密の事ありと我く是を海上より龍の迷にきて暴風を  
 習て水難ふ遇ざる謂を以て船中乃守護神とをなをまて一切  
 の方お龍く伝ふ乃威靈暫も間ひなく士農工商とをふま龍願乃  
 我れする子をくみ出とありに被に福被守護の神とを以たり  
 すと此等像に大願と稱する事ありと一は災窮の危生より福被



疾やまひ病びやうのの流りゅう生せいはは療りやう業ぎやうををととととはは遠とほ魚ぎよのの流りゅう生せいにに苦くるん  
 ととととはは回えんのの經きやう令りやうれれ流りゅう生せいにに延えん壽じゆををととととはは愚ぐ癡ちのの流りゅう生せいはは智ち恵え  
 城やしろとと經きやうんんのの誓せ願がんををとととと

廻國雜記云此山のくんと十里小中禪寺とて檀越ありてなり電山  
して西表へ往る今宵はくんと十と表より月もいづくおすくれなり  
き渺漫たる湖水傳う秋の深とつる所は紅葉をみえりそひる月  
小映に傳はる舟にのりて

[illegible]

ねにうみをくぐりてかいふとるまみふゆをきく  
 おまふゆりむくく迎とてふとるまみふゆをきく

大鳥居 日、大經の毛むかひあり、尾髪山の麓乃、りあり、唐銅湖の端は、建も、茲より石階を、むり、平路より、す、石階

二ヶ所<sup>ふたところ</sup>を<sup>を</sup>上<sup>うへ</sup>で<sup>で</sup>親<sup>おや</sup>者<sup>もの</sup>堂<sup>どう</sup>お<sup>を</sup>通<sup>とお</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>正<sup>ただ</sup>面<sup>めん</sup>なり

護摩堂  
之間に  
石階を  
曳き上  
りて觀  
望する  
處あり

鐘樓 二間お三間鐘を古きものの回縁お忍び今の鐘へ文化年中移造

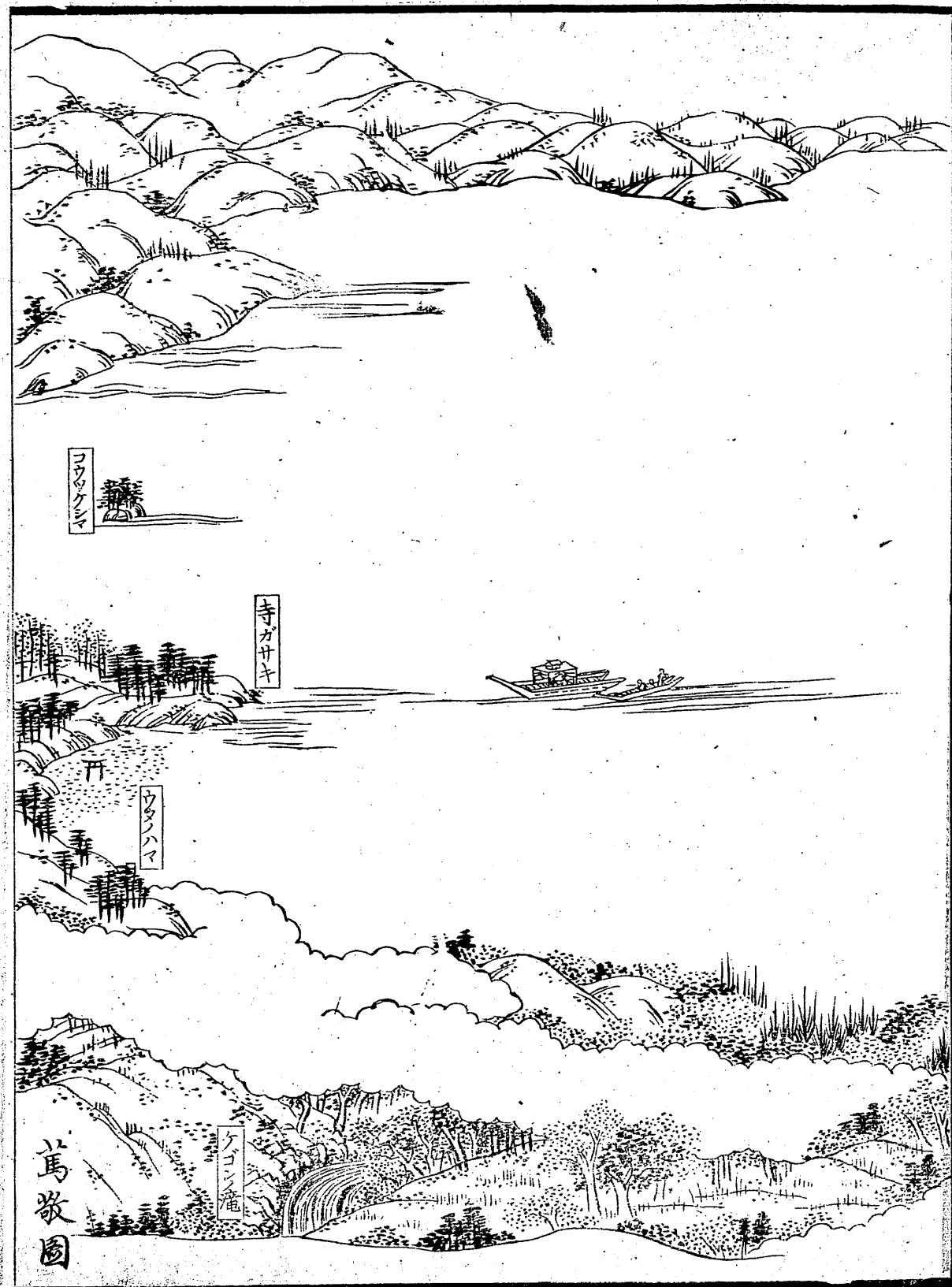
三層塔 赤塗之間 四旁に智如來を安置 右の旁にあり

採燈護摩堂  
拜樓より東の方爰の後より一階高く築地あり

古釜  
二口 鑊摩堂の張小あり 徑三尺六寸 銘有 一八貞和二丙戌年

二月聖紀阿彌陀佛奉施入中禪寺一ハ應永卅三年の病室修懷に  
底朽て而く損ぞり此卷ハ少くハ形をり

中禪寺境地並湖水圖





新舊總赤塗南向二間  
二之間太床造箱棟滅令一のあ

物高欄彫物彩色正面之扉墨塗髹に三ツ掲ぐ瑞籬四色と打込一色

も赤塗正面と東北方より門あり境内庭ふ玉石を敷き勝道上人弘

仁七年教是道珍等と侍ひて一多ふ時又男辨山の頂上ふ

て三神の意向を拜し、玉ひ下山乃時、簾の社殿を造立し、ふと何ふ

此處社にあり是れ之社は座乃榮創と云ふ

元禄四年四月廿七日 鹿山 座主宮公辨法親王始て定ぬるひるの時非前より  
法樂並に法を修しむるに納めたる

中禪千載祠一拜覺靈竒積雪三冬色開花四月枝

湖光連碧落日影泛澄漪留意人寰外促歸聊賦詩

銅黃熟赤塗どうわうじくそうに方椽ほうせんの六間ろくかんに六間ろくかん地蔵ぢざう等を安やすに

持殿より西の方狹尾赤塗本号千手大士立木の像一

丈六尺素本勝道上人の作堂内の左右を曰天王の像を安次坂東

十八番の北所なり

親愛の誼ありとて扁額を懸くを向希し惜ぶ  
坂東勝記とてその不出る由

中<sup>ちゆう</sup>禰<sup>ねん</sup>ち<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>み<sup>み</sup>づ<sup>づ</sup>う<sup>う</sup>みの<sup>みの</sup>お<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>波<sup>なみ</sup>

補陀洛伽のちぢぢぢぢぢぢぢに立本乃ちのひ久し

白粉附大麻造

本學くわん虚こをくわ龍りゅうを安あんに

天  
聖  
堂

本号受戒の

相本堂

さへうのやう

飛煙堂 ひえんどう  
 摩訶羅天堂 まかろてんどう  
 山王社 さんおうしゃ

信一  
 此を補陀洛と名付くれ  
 子ハ社首・庶祖上人達  
 信一  
 此を補陀洛と名付くれ  
 子ハ社首・庶祖上人達

草創多事の所屢新舊の靈驗を被りて多ひ殊は延暦三年電山

多岐西嶺の南岸に於て大士の新嘗と威見ありてまつりて

容を新く安重しむひの上人徳思惟しむに二荒各處

の山中ふして親香薩埵の稱々乃奇獨を示しめふと是た右伝

力のみに<sup>りき</sup>何<sup>なん</sup>も<sup>も</sup>出<sup>で</sup>さ<sup>さ</sup>ず<sup>ず</sup>必<sup>かならず</sup>大<sup>おほ</sup>士<sup>し</sup>有<sup>あ</sup>縁<sup>えん</sup>の<sup>の</sup>冥<sup>めい</sup>坑<sup>きやう</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>也<sup>や</sup>

おむ大士のふみより南海の補陀洛山と此所を標顯して別當山と補陀洛山と名付給ふるなり

唐銅鳥居 男神山屯りにありて男神山大権現と行きて南山座主宮の御文讀ある額を掲ぐる

石燈籠 二基を居乃内あり

本戸門 七月七日禪頂より老若より屯る者お禪開き津古口と稱ふ

船禪頂 是より六月朔日は開闢より同月十一日より十九日と宣ふ船禪中の者連日漕出巡拜するなり是を船禪頂といふ又七月中は船のりのはきは船を出入り名付て是を補陀洛船と唱ふる由男神山禪頂よりそのも別は執行して山禪頂と南方並て禪頂よりりのを乃一振なりとせ

古碑銘 性靈集に載たる弘法大師の記文乃銘なり唐銅鳥居のも

中より有り勝道上人神護景雲元年より改法を企むひ漸く延暦の初より登臨を極めたる銘文弘法大師書記より古碑に所は有りか被法より文字見ゆる所なきは仍て南山座主宮

准之后公辦法親王御再興

准后の御撰文もあり是を不朽の傳へむんを尊意あるに初より箱と造る石碑の上は被よりしる由表系文を見え禪ど其初に記

お細字に彫附あり此碑を唐銅鳥居の前は建し銘文次は出たり

當山座主宮

公辦法親王古碑銘御再興の御撰文

### 重建勝道上人補陀洛山碑記

人籍靈境以進道境因勝人而彰名如補陀山亦徵哉勝道上人創窮其頂精練功成弘法大師揮天縱



才文之詳矣於是世人昭々知其爲名山也其文則載性靈集傳到于今而其碑則歷年遼邈掃也不存嗚呼廢而不興非人情也近者余鼎樹貞珉刊其文焉庶乎使臨者讀雄文以審靈境知靈境誠爲進道之緣矣然則此舉豈曰無所係乎世有高談淨心蔑視山水者不亦謬哉因題碑陰聊紀歲月云

寶永二年歲次乙酉春三月

前天台座主一品公辨親王識

沙門勝道歷山水瑩玄珠碑並序

蘓巔驚嶽異人所都達水龍坎靈物斯在所以異人卜宅所以靈物化產豈徒然乎請試論之夫境隨心變心垢則境濁心逐境移境閑則心朗心境冥會道

德玄存至如能寂常居以利見妙祥鎮住以接引提山垂迹孤岸津梁並皆靡不依仁山託智水臺境瑩磨俯應機水者也有沙門勝道者下野芳賀人也俗姓若田氏神邈救蟻之齡清惜囊之齒桎枷四民之生事調飢三諦之滅業厭聚落之轟々仰林泉之皓然粵有同州補陀洛山葱嶺挿銀漢白峰衝碧落礮雷腹而鼉吼翔鳳足而羊角魑魅罕通人蹊也絕借問振古未有攀躋者法師顧義成而興歎仰勇猛以策意遂以去神護景雲元年四月上旬跋上雪深巖峻雲霧雷迷不能上也還住半腹三七日而却還又天應元年四月上旬更事攀陟亦上不得也二年三月中奉爲諸神祇寫經圖佛裂裳裹足弃命殉道緇

傳

三才圖會



婿菜



園に出せし菜なり  
ひて菜といふは  
山陰の八景に  
用とあせり  
婿きりのなり



姫石楠木



岩千鳥

花はうす紅と  
表は出る



負經像至于山麓讀經禮佛一七日夜豎發願曰若使神明有知願察我心我所圖寫經及像等當至山頂爲神供養以崇神威饒群生福仰願善神加威毒龍卷霧山魅前導助果我願我若不到山頂亦不到菩提如是發願訖跨白雪皚皚攀綠葉之璀璨脚踏一半身疲力竭憊息信宿終見其頂恍惚々々似夢似寤不因乘查忽入雲漢不啻妙藥得見神窟一喜一悲心魂難持山之爲狀也東西龍卧彌望無極南北虎踞棲息有興指妙高以爲傳引輪鐵而作帶笑衡岱之猶卑晒崑香之又劣日出先明月來晚入不假天眼萬里目前何更乘鵠白雲足下千般錦華無機常織百種靈物誰人陶冶北望則有湖約許一百

頃東西狹南北長西顧亦有一小湖合有二十餘頃眇坤更有一大湖畧許一千餘町東西不濶南北長遠四面高岑倒影水中百種異莊木石自在銀雪敷地金華發枝池鏡無私萬色誰逃山水相映乍看絕腸瞻佇未飽風雪趁人我結蝸庵于其坤角住之禮懺勤經三七日已遂其願便歸故居去延曆三年三月下旬更上經五箇日至彼南湖邊四月上旬造得一小船長二丈廣三尺卽與二三子棹湖游覽遍眺四壁神麗夥多東看西看汎濫自逸日暮興餘強託南洲其洲則去陸三十丈餘諸洲之中美華富焉復更游西湖去東湖十五里許又覽北湖去南湖三十許里並雖盡美摠不如南其南湖則碧水澄鏡深不

石間の苔の中に生じ

丙申小春  
椿山人畫

平 强



桜櫻つうざう  
 初はつ夏なつになり花はな咲さきくも  
 梅うめのもの小こあるるのの葉はハ  
 梅うめのの如ごとく小こ細こあるるゆゑハ  
 石いし附つきくるるなるるもわづす  
 まくまふもわづずば紫むらさを  
 花はな壁かべなり



可測千年松柏臨水而傾綠蓋百圍檜杉竦巖而構  
紺樓五彩之花一株而雜色六時之鳥同響而異聲  
白鶴舞汀紺鳬戲水振翼如鈴吐音玉響松風懸琴  
抵浪調鼓五音爭奏天韻八德澹々自貯霧帳雲幕  
時々難陀之羃歷星燈雷炬數々普香之把束見池  
中圓月知普賢之鏡智仰空裡惠日覺遍智之在我  
託此勝地聊建伽藍名神宮寺住此修道荏苒四祀  
七年四月更移住北涯四望無尋沙場可愛異華之  
色難名驚目奇香之臭已尋悅意靈仙不知何去神  
人髣髴如存念歲精之無記惜王侯之不遊思餓虎  
而不遇訪子喬而適去觀華藏於心海念實相於眉  
山蘊蘿遮寒蔭葉避暑喫菓喫水樂在其中乍々乍

干出塵外九臯鶴聲易達于天去延曆中柏原天  
皇聞之便任上野國講師利他有時虛心逐物又建  
立華嚴精舍於都賀郡城山就此往彼利物弘道去  
大同二年國有陽九州司令法師祈雨則上補陀洛  
山祈禱應時甘雨霽霽百穀豐登所有佛業不能縷  
說洛日車難駐人間易變從心忽至四蛇虛羸攝誘  
是務能事畢矣前下野伊博士公與法師善秩滿入  
京于時法師歎勝境之無記要屬文於余筆伊公與  
余故固辭不免課虛抽毫乃爲銘曰

雞黃裂地粹氣昇天蟾烏運轉萬類躋闌山海錯峙  
幽明殊阡俗波生滅真水道先一塵構嶽一滴深湖  
埃涓委聚畫飭神都嶺岑不梯鸞鷟無圖皚々雪嶺

岩鏡  
初夏に花  
馬の如く紅  
色あり岩  
に生じ



恒古椿  
新

岩蓬  
戒  
岩蓬も稱し



何亭寫  
阿

苦桃

花ハ初夏に咲桃の如く乃如く薄紅  
た翌春なり実を結ぶ其木の實  
より小なり八月に熟し其実熟せし  
と丹頂好むゆゑ延齡の茶なりと  
稱し其木は山に生じ其木の葉  
似たり

必方製香



雪割草

梅葉の如く  
りなり



此実赤色  
なり

丙申十月上浣  
琴音寫生

曷矚誰廬沙門勝道竹操松柯仰之正覺誦之達磨  
歸依觀音禮拜釋迦殉道斗藪直入嵯峨龍跳絕巘  
鳳舉經過神明威護歷覽山河山色崢嶸水色泓澄  
綺華灼々異鳥嚶々地籟天籟如筑如箏異人乍浴  
音樂時鳴一覽消憂百煩自休人間莫比天上寧儔  
孫興擲筆郭詞豈周咄哉同志何不優遊弘仁之年  
敦牂之月月次壯朔三十之癸酉也人之相知不必  
在對面久話意通則傾蓋之遇也余與道公生年不  
相見幸因伊博士公聞其情素之雅致兼蒙請洛山  
之記余不才當仁不敢辭讓輒拙拙詞並書絹素上  
詞翰俱弱深恐玄之猶白寄以瓦礫表其情至百年  
之下莫忘相憶耳

西岳沙門遍照金剛題

右性靈集所載也

中禪寺私記

日光山滿願寺者稱德天皇御宇神護景雲年中當  
國芳賀郡人沙門勝道勤求佛道攀躋靈窟爲鎮護  
國家爲利益衆生勸請於神祇造寫佛經始卜斯山  
新起道場其山中央有嶽其高不知幾千仞其嶽半  
腹有大伽藍号中禪寺安置丈六千手觀音像其傍  
建立靈祠奉崇權現又妙法蓮華經一千部并大般  
若經六百軸併納之箱底安之堂中每歲四月二十  
二三日兩朝之間有修大會前日講般若經次日講  
法華經奉辨備三十三杯御膳奉供觀自在尊辨備



百八十杯御膳奉供權現王子件會住僧等守次第  
勤行之已爲規模敢不失墜爾後碩學相續勤來講  
匠嚴重之儀不遑具記自茲寺至于山頂二百四十  
町者結界地也五種相分四神具足其前頭有大湖  
揚五色浪如八功德池湖之南涯有別所稱歌濱彌  
勒大士妙吉祥天靈驗之場也湖坤有一梵宮號曰  
輪寺安置不動降三世軍荼利大威德金剛夜叉等  
尊像蓋是本願勝道上人修練之砌也其前有小嶋  
彼上人止住此島禮拜之次奉祈聖朝柏原天皇遙  
聞此事深成歡感令補上野講師仍号上野嶋湖西  
岸有十六丈千手觀音石像曰千手崎弘法大師手  
書山門題額補陀洛山發心檀門其門六字蓋是宛

六度也化導無限遍被遐邇之鄉功德不孤必有隣  
旁及幽顯境上自天子以至於庶民壹是孰不欽仰  
誰不歸依哉其地之爲休神藏蔭々送千嶺高峙靈  
湖渺々寫四暎而遙廻凡厥峻極之狀勝絕之美具  
于弘法大師御作勝道歷山水碑文序今之實錄粗  
舉大槩而已于時保延七年夷則初三日吏部侍郎  
藤原敦光爲貽方來揚確記云

武射祭 每歲正月四日武射祭の神事として所宮乃社家一人家の  
社勢と爲掌はるもの坐山一古矣乃武射乃祭儀とて湖水の色  
て武射乃日光町方又近村の若く坐山一瑞と紋あらる  
時系乃を第一回とて後正是上古より今系儀なりと云  
慈悲心鳥 此鳥坐山一別と名あるとて武射祭其無味と云

沙羅樹  
慈悲心鳥

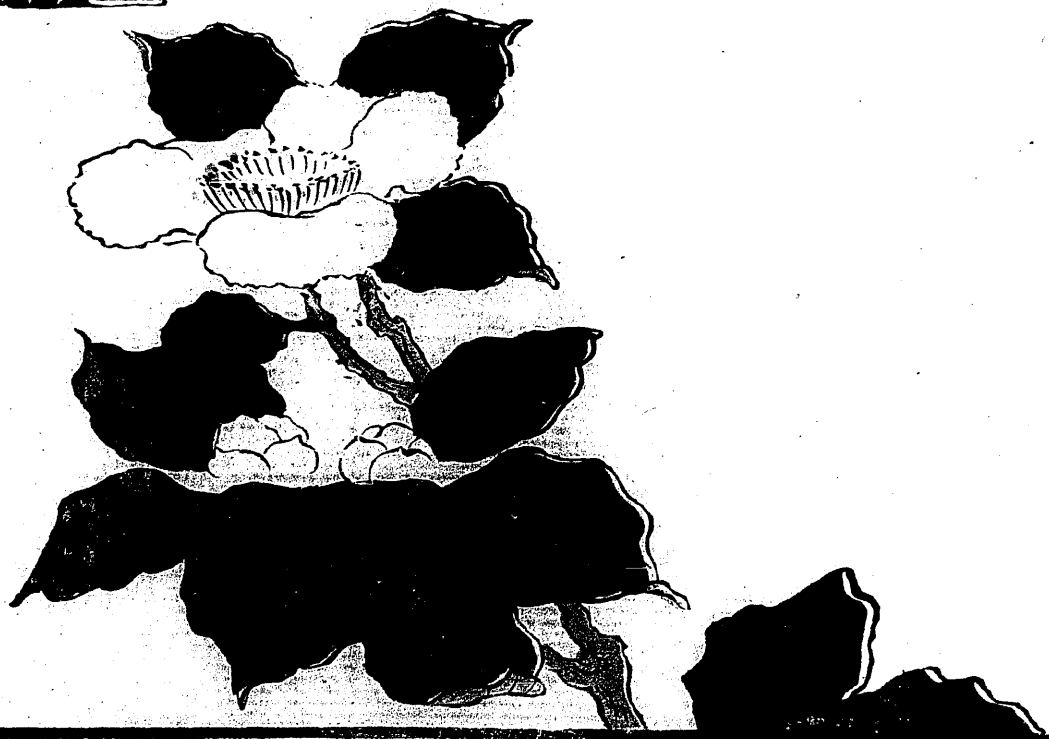


慈悲心鳥

神山靈鳥自呼名薄夜層  
巖陰籟生鸚鵡久休宮裡  
語頻迦已脫殼中聲珠林  
開處啣花去瑤闕過時向  
月鳴樹色深々看不見天  
風吹度梵王城

紫溟曠

石阪尋教寫





いづるも、稱するも、弘法僧と名附るの如き、後初夏の頃より、  
夢を致せり。此山中に、いづる荒涼寂光、又も粟山、過るも、多く、栖  
る由、時として、内山内にも、廻翔し、来り、去り、あり、人家、多き所、へ、來る  
と、稀あり、其の、最後、二本、宛より、か、迷へり、羽、色、皆、黒、の、如し、う、も、い  
鴨、群、の、音、あり、其の、邊、先に、榛、名、山、といひ、て、社、家、乃、家、に、今、う、う、ま、何  
る、い、が、活、通、る、ま、山、は、三、室、を、戒、行、を、あ、ど、せ、り、う、三、室、を、い、言、と  
稱、する、戒、行、を、を、教、文、う、な、け、り、と、い、ひ、う、ま、は、や、く、行、う、い、や、あ  
う、す、を、戒、行、を、と、い、う、を、意、然、人、を、あ、う、と、舍、乃、あ、る、が、活、通、り  
婆、羅、樹、或、を、婆、羅、双、樹、と、も、唱、へ、常、は、夏、棲、と、い、う、は、月、比、む、う、  
や、あ、う、や、う、れ、い、を、棲、と、い、う、大、は、其、乃、う、山、中、は、多、く、生、ぜ、り

男體山 二荒山 補陀洛山 黒髮山 黒上山 日光山 男體山 なる、稱、せ  
り、二荒と、稱、せ、り、況、も、前、卷、を、も、あ、う、い、れ、を、疾、は、黒、と、さ、う、黒、髮、山

と、唱、へ、う、い、う、方、集、る、を、も、さ、う、古、き、唱、へ、い、く、を、あ、ける、古、を、が  
活、通、る、を、あ、ける、う、山、を、積、雪、は、う、れ、と、稱、し、う、嶺、を、い、う、と、松、根、松、梅  
等の、古、木、積、翠、藤、藤、と、い、う、ま、ま、は、い、や、う、う、名、附、う、る、謂、と、を、稱、し  
或、況、は、上、古、乃、清、せ、り、う、四、乃、名、と、毛、國、と、名、附、毛、と、い、う、時、を、成  
熟、れ、を、な、り、田、畠、は、穰、り、て、生、ぜ、り、の、成、作、毛、と、唱、へ、成、熟、を、さ、る  
地、と、不、毛、の、地、と、呼、ぶ、如、く、南、國、も、神、代、より、う、山、は、樹、木、は、茂、る、  
う、る、より、國、の、名、も、毛、より、記、れ、る、や、又、毛、と、ハ、茶、木、稻、蔬、の、生、熟  
を、る、謂、を、さ、て、黒、髮、山、と、も、稱、する、あ、う、ん、と、い、う、此、況、の、如、き、も、そ  
理、當、なる、に、似、う、り、又、男、體、山、の、名、より、大、ま、子、小、ま、子、の、二、子、の、稱  
を、え、生、出、せ、り、あり、叔、藤、孫、頂、は、より、登、る、と、凡、之、里、の、道、道、を、り、絶  
類、ふ、三、社、と、記、せ、り、頂、上、乃、廣、さ、南、山、拾、町、許、東、病、二、町、や、と、登、道、峻  
崑、ろ、て、道、絶、う、る、危、き、所、を、あ、う、崎、渡、する、事、易、し、仍、て、古、木、の、蒼、翠









湛  
南  
馬



如  
宝  
山



小  
マ  
ナ  
子



男跡の晴雪



男體山



大マナゴ

南湖 中津より北湖ありと唱ふるものあり一の大湖として九東西之里  
餘南九一里餘又八切瀧池と名附るものと縁起ありたり九山腰  
山趾に四指八湖有とあるするに違ひを在るも宜しきか知れりもの  
あり大肝乃記文に載するが如く所坤更有一大湖畧計一千餘町  
云清潔なる冷なる水鱗鱗生をば一熟の塵芥もたぐり白波  
汀深は深く早水又を霖雨日も不耗不溢それのく計獲系雲元年  
勝道上人遊漢より一より今も現然とく奇観ある大湖といは  
南岸橋 華嚴滝落口より上あり湖の流瀧に到る水路に板橋  
を架けお供り人秋漢より是と渡りて別あり来る水路と云ふこと  
足尾より味へ掛り炭上中津より別る岐路あり又より山路乃  
陰と經る中津より宿るもの性来たり  
歌漢 湖の南岸あり上世勝道寺所在の汀漢と遊漢に傳りきり

れ一時天人下りて秋詠贊嘆ききりて依りて所成秋漢  
と稱する由より旧跡今花供り老の籠る所と宿と稱するなり是を  
旧跡ありと云り  
奇蹟 南谷より秋漢より西乃方地を獲る所の創建ありて是を  
大肝の系創とて嘉祥元年四月此地に到りて多し茶師堂を創建  
し多し茶師乃本寺を安し寺堂の中にお茶壺を埋めし茶師と  
稱号し此茶壺より八天竺乃耆婆醫王より一行和尙お傳り茶壺  
ある由に奉り南谷北古記ある宸極の六軸の文にお出ることを云ふ  
南谷より八町餘繁き出りぬき小山の出傍に茶師堂ありて是を  
傍茶師と稱する所なり  
日輪寺舊迹 勝道上人秋漢より大肝系房と結りて時或秋の爰より  
大日輪の内に大日輪の出現を獲りてより由ある大日を刻てけ



石楠花





西に茶剣きつれ日輪寺と名附きし中蔵も南蔵なり

上野島 此地を中蔵寺別所と云ふの跡より所は湖中に浮き出

る如く是ゆる島なり奇石珍木多しといふ勝乃上人の遺骨を地

解石より取りしうふ慈眼大師乃遺骨を地へ埋めり仍て是を船

頂の跡と云ふなり

千手勝 此地を中蔵寺より西寄の湖岸より傳へし勝道上人延暦

三年四月廿日湖上よりて金色の千光眼を觀向と稱しりゆゑ

爰に千手大士と創建しむ補陀洛山千手院と名附きしと云ふ後

弘法大師此の時此地に來りて千光眼を乳指しと補陀洛山衆人

檀門といふ額を書きし堂宇は掲ぐるといはれは此より燈火は懼

焦土と號しと文政二年の春一山乃法門院上人職あり時は榮顯

小依て補陀洛山衆人檀門乃額字也

河門主公猷大五洲筆を添せりといふ

千手原 是を千手勝より續き赤沼系此南端より一里

半餘ありける由茲を往たりる爰より稱を初する所のと云ふ

千手かんひと稱する事此の名産を生じ

千手砂利 是を千手勝の山勝にありま白く金剛石の如し或を

千手石とも唱ふ 千手清水 千手堂の後より流れる清水あり

萬蒲沼 南端の西寄の入口より爰の西端の西端に萬蒲あり

是より西寄と境とす

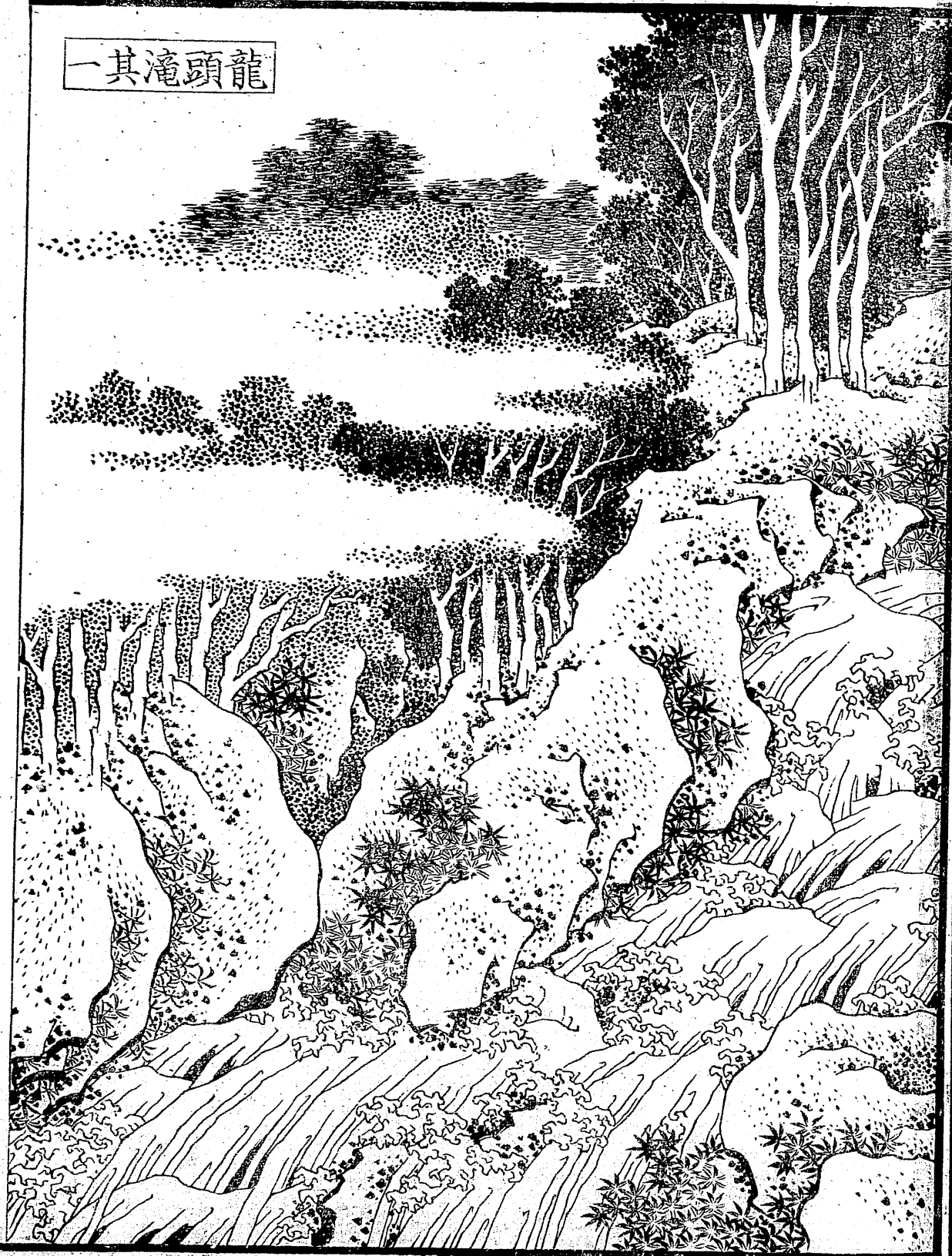
赤岩 南端の西端より 白岩 南端西寄の湖岸あり

彌陀壺 萬蒲沼の邊より水乃山中に洞窟あり縁起に勝道上人

の遺骨を此窟中に納むとあり

龍頸滝 是を湯院の下流なり路傍より望む時と云ふ勢あり

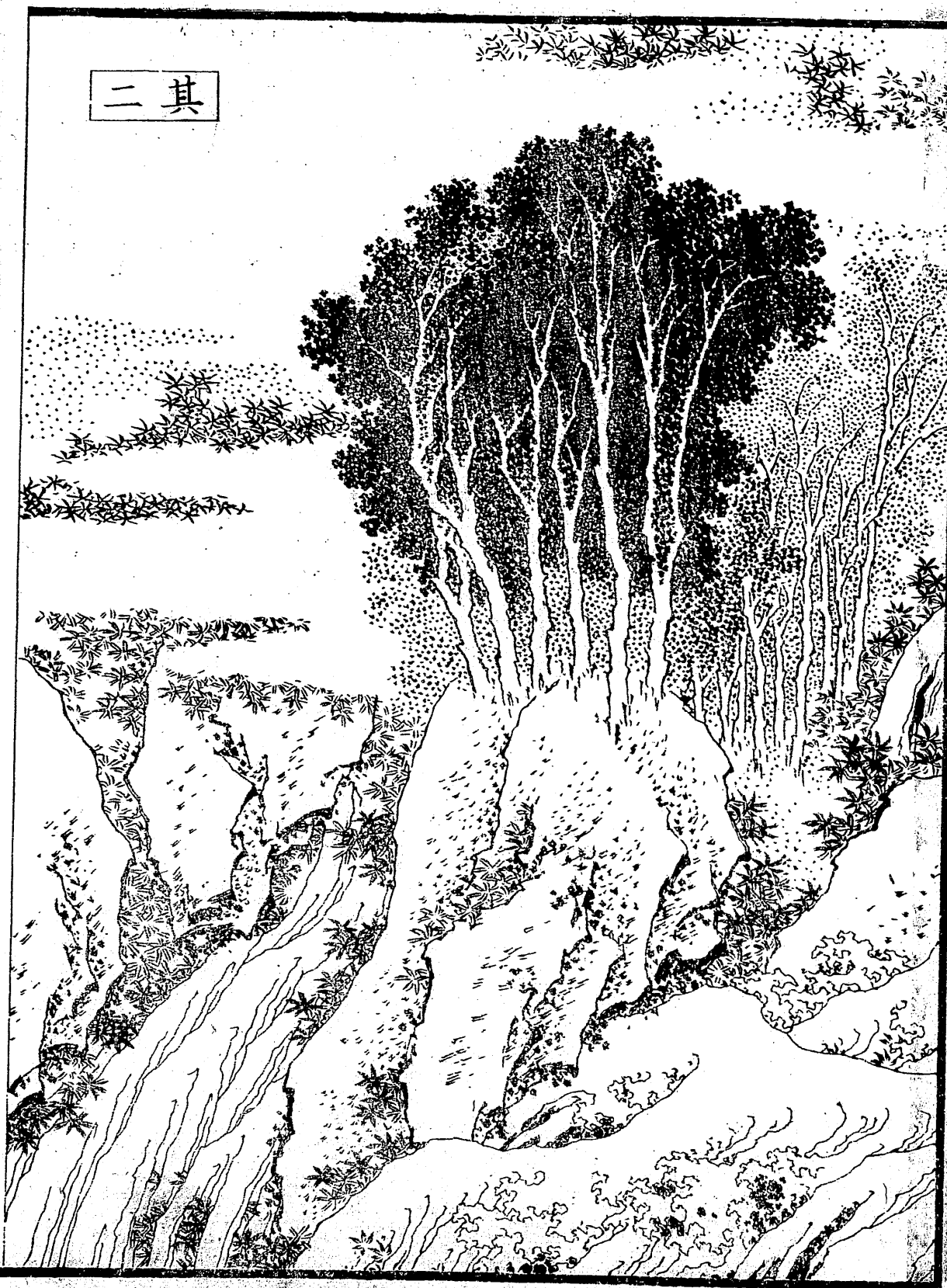
龍頭滝其一



七十三  
画狂老  
人化筆



其二



應需車  
狂老人  
已屬意



龍乃如放石附々秋來れ紅紫乃好石なる由名別名と  
紅紫瀑とを唱ふ此瀑を南湖と入るを教ふ所は龍有て龍系を  
事筆紙に尽かす大槪と略圖して前より出たり

地獄茶屋 中津古別所乃遠より湖あり此屋ハ一里餘ゆきて往來  
橋を踰て其上に何名附るまハ此茶屋より東にあり男前山乃  
麓に洞穴ありて窟底乃海と知る由名古人地獄穴と稱する所と  
是近きゆ名竟み地獄乃茶屋と唱ふ爰を湯元と稱するれを旅人  
中休の爲に設く

本又寺旧跡 是も湯元往來橋乃東の山後あり弘法大師開基と  
傳ふ是も今も故地乃みま名を傳ふ

顯釋坊淵 湖の東乃入江流り此屋古此僧が入水の所なり年々七月  
溪深頂乃時毎法との具供する彌陀經を指り付て湖井へ投じ人

回向と進ば慈弥陀經を底へ引出の如くして沈む深頂は道  
俗奇異の想をなせり

辨山 九き山あり湖あり水より男前山の南に連る

辨石 湖中より辨やまれ處に有る名附く

四條寺旧跡 辨山より前より湖水の邊弘法大師建立此旧跡と元

戒壇所と号し

法華密嚴寺旧跡 辨山の上方に玄海阿闍梨建立

轉法輪寺旧跡 辨山の麓教是建立

般若寺旧跡 西湖の岸より弘法大師の建立なり

梵字磐 般若寺の麓あり此内にあり弘法大師梵字を刻する

若松崎 老松傍 日輪寺旧跡の邊と般若寺跡の邊とあり

標芽原 或は我場系又も赤沼系あり唱ふ是も標芽系の異稱にて

竹谷宮



赤沼ヶ原









其二







姓及する旅人より毛鷲の史由近く見らるるものありかど近來ハ  
見るそのあき由され小神廟の伝説遊山といふが活れるを此の遊  
山より白鶴と見んといふ事毎々表より秋迄乃内一皮宛中様より  
り湯元へつてゆきせしに昭和の末安永の始れよりも永世の中  
みあつた蓋のゆへ六尺りやある人より其路を出し居る  
と毛見より其より後年毎日此世と還進とも近きところを絶てま  
休むふも見ざるを近世人乃かえりて壺音のえんぎ進を立不  
と居んといふ蓋成かへたなどといふ事神音もかそれるを蓋  
落乃中つて進る事ある人と活進也

野端湖 男神山乃西あり廣さ九十町小一里許あり湖方の廣積  
とつた皆二十町と一里と定めて方量と知べし下図に  
西湖 千手塔より西小あり由名名とて或を薊とひく湖とをいふ

九一里に二指町評記文に西顧亦有二小湖合有二十餘頃と云

夢湖 男神山より乾は南に夢多き由名名附廣さ二十町許

将麓湖 男神山乃後の方名希嶺の麓にあり一説は上世山中より人

と害はる事就すみける由名名神にふた将麓といふ  
余取の言山其地よりそけ名あり

魔湖 是を奥白根と名白根と乃名あり四色名像より深き事ハ  
教名よりけ湖乃端へ長進し近附くものあり其由名は魔湖と名  
附るを廣き湖といふゆへにぬ中

佛湖 是を前の魔湖と相對しより廣さ二四町四方名有べし仏  
砂利と出に湖乃形を山越の跡跡乃音密ありとて名附る由名  
是を白根山乃條に出たり

絹沼 是を神神乃内名進とて毛進谷名桑山郷乃山奥より名行て湖



あとも見ゆるりの稀なり河内より栗山は六里の山脈なり又  
栗山は内湯西又河内より栗山は六里の山脈なり又  
合く括二里の山脈は小人の境なり終る所は名を括後する所の形  
唯古より傳ふ所と括後する所は名を括後する所の形  
山脈は絶頂より遙か見ゆ方位を男神山の山裏にありて廣さ九  
一里四方は八陣の記文云北望則有湖約許一百頃東西狹南北長云  
又云覽北湖去南湖三十許里云云湖乃清潔に云云異名珍本湖  
乃連り松栢枝を垂下底も深なりす砂石皆み彩乃色なりて清水  
水のづらみ色に見ゆせを神の華なりと云云系なりて機を織る  
か如く四季乃む常に絶たぬ小仙人境と云云小庭く樹木皆岩上  
小庭壁して曲折自然の系なりと云云仍く砂石と称せり今ハ縮  
沼と号し水末之方へ流進落余津を至りすこ一流を上野の山

中へ流入り利根川の水深ありともいふより水踏とされも見  
定免たるものなり南國を流進る者陸下流へ流れ入る利根川と  
稱するをば人の知進る所あり亦ハ流進上世より一湖なりて  
由なれと云い流の次よりや分製して十二湖とありや流ハ次  
分して合流して利根川とあり

湯湖 是ハ湯元小あり座と九括は町小二十町併

中禪寺温泉 八湯 中禪寺別所より西にあり赤沼系と逕湯

元を三里日光神橋より六里あり雲も風雲威をげり三月末  
迄も終る由云四月八日と初より終る山々各湯室を聞き初む  
是と云白根嶽をすく流進る六月末より六月小終るを俗  
言するものなり九月に栗山は名を栗山は九月八日と終るに  
湯室をすく終る下り日光町方の所の終る湯室を聞き終る

中禪寺奥山温泉之圖



コノギ

温泉湖



武州不退林意



日光町より米穀園蔬を初先主存乃佐品を資貢ひ送さる

河系湯 熱く極く時ある

薬師湯 才一眼病ふ

焼湯 苦味

龍湯 志冷なり

中湯 熱なり

笹湯 寒暑の湯をさる

石取湯 才一金をみぬ

荒湯 熱湯なり

自立湯 平湯なり 湯あり時きひ水不自由なる時

湯平 温泉の浴室九軒あり毎年始と終とほるあともあり記

よりい温泉を因深き一年代あり九軒の浴能り各戸廣み  
接へく地形を又抵平煙うくく三町経た有庭くれと東寄

の山像より温泉生はる少志皆東北山寄に連なり西乃方に  
平煙續けくをさくく低く古き変替も一面の湯湖をて有くゆあり

人今も蓋茂のみ生ひ茂きり叔止而より止良田田の間にあり

其山端のこい次小ありなり

金精峠 湯平より西乃乃る小重精沢と喝ふる溪間に徑るを陰隆

の路を傳ひり奉一里半の路を徑て峠より至る金精乃社を二里あり  
又よりすこ半里を走りて峠あり金精精沢と稱する小相あり系

社あり是は社古俗りの納くるるや初小減令せ一男根をりて社  
新と稱す中古より自然に男女交合の形は出来くる古木の根株

を納免るを法類と稱する相ありといひ傳ふは社を湯亭のり  
持とより叔止峠の古名を機峠なり和名抄小本枝相交下陸を機

といふと云ふされを不番相通けるより一といはく一あり味  
と精懸せるなり茲の山中肉蕨蕨多く生はるるさむの石も

きり草と味は草ハ茶品より一は補腎を補助するものあれば  
とく何そのり小湯物と記して金精と稱一古名の機と稱して

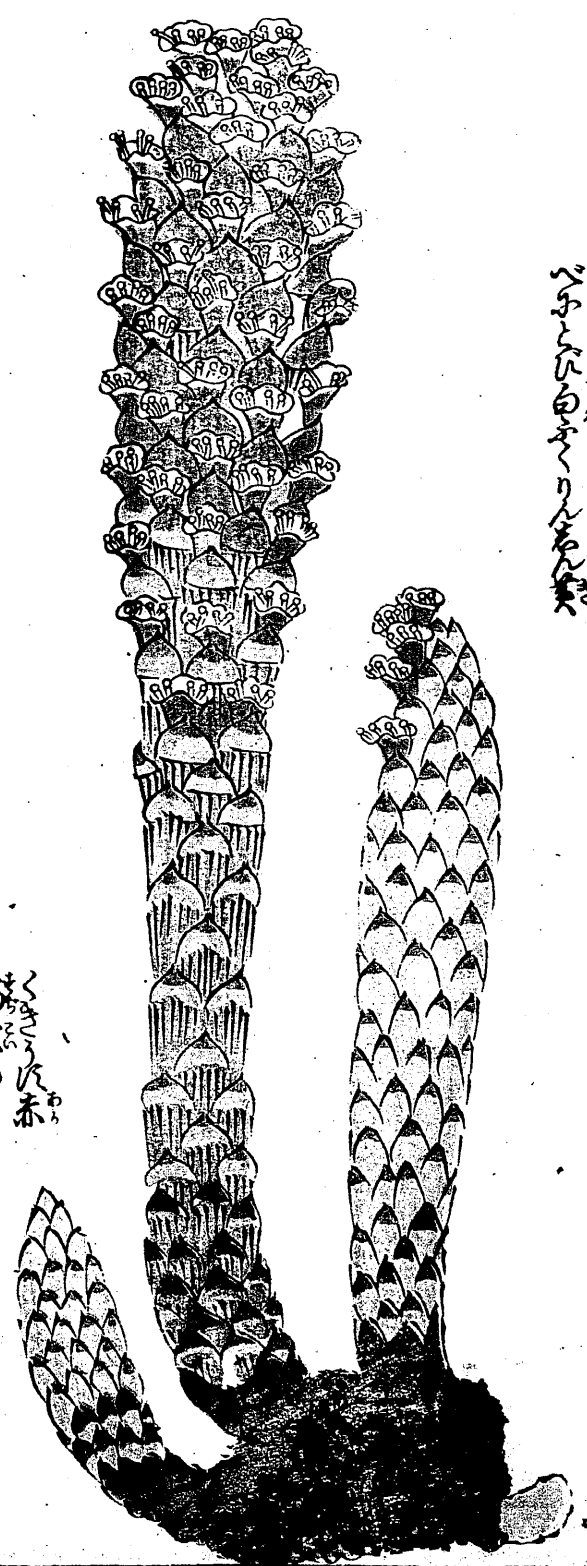
肉從蓉

初夏のすゝめ生いそぎ白く上に  
花のいそぎ実ききるりのを赤し

湖子 湖氷

紅  
いふふいふふいふふいふふ

うけき色



九葉  
さき赤  
紅  
赤  
赤

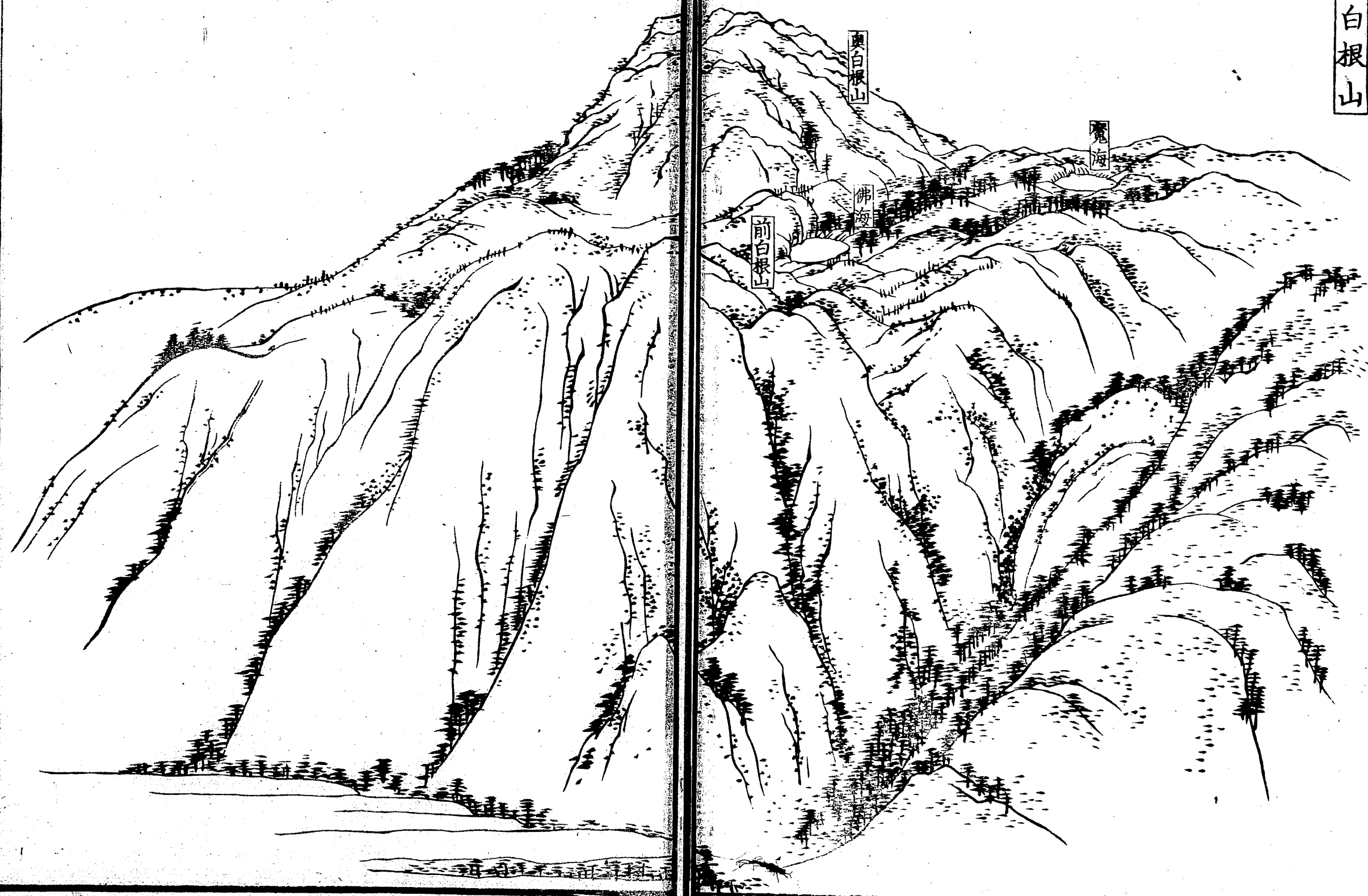
白

きりりと唱より今ハ又精候してきりとのむの香をまに替て  
邪劣の唱へと替ること幾ふをきにあうげやされども六番に通  
用するより起進里又ハ味を上野下其の園界に據して幾より  
西乃方へ下るを四里許の嶺路と捨て上員沼田に近き小川村と  
いふ小島の人境をまわれける山道なり又より越後へをゆけり  
いり常に人れを行なり

赤白根山 湯平より乾小島又赤根山といふ西の湯平は西の方  
くは沢より登にありあふ連る山岳を是も白根山に直り出る  
峰巒なり赤白根を頂上を九之里許六月あたるを谷く凍雪あり  
消やうは湯屋より居あぐり盛夏の時も赤白雪とせり山を  
るよち主艦くくは沢にゆく或ハ十町又ハ六町も嶺攀一尖岩  
と踏く漸く登りて赤白根山の頂上にあたる又赤白根山は実凡し



白根山



白根葵 しろねあひま



椿山人寫 しんざんじん  
生 せい  
平強 へいさか



西は特々一皆石山より樹木更へ生ぜば白根乃頂上より昇降  
して此より一里あり実小美山より岩を雨に若松と称せ  
るものみ一面ふ生ひ茂り花咲夏月実を結へり大さ豆よりかく  
色赤く熟なり丹頂花と好く熟なり以て来りて其実をもちて  
けしや成りて若松を結の好る葉あるを延敷と傳へて葉品か  
りといふ絶頂小日光権現成に述る社有り蓋して白根権現と崇む  
社を産別より造り承安元年春納の銘あり山類稿にせしハ慶  
安二年のことあるは震動日と經く不止高山  
所産を今ト云ひ村官持殿より八幡山修行成を妙典と稱せしを  
のいふる當時絶頂権現赤沼系より権現二三尺修禱り上又ハ  
金津外にも傳ふる由焼被述し二町許の岩穴とあり深さ四十丈  
といふとをあるは住著より勅傳ありしに官もけ時室中へ漏る

ける由産別小造りて存納すといふとて此嶽を上野中野の國界  
かゝる上段の方あるハ分目と覺しき而は社有り爰を上げ其乃  
地より被去りて荒山権現と崇め祀り生土社より毎冬若松  
とありとける由産別より取くる新糸と聚て小携へて各社よ  
り往還と成たる如く諸い合をて禁をばりて附くることを數多け  
るを何とをあるは述をきくより其時を布あど引さへるやうにぞ  
見えける新糸を是も而の諸社と同社より社号れかき述るもの  
とぞ述るは述を峻嶽とあるは其の由來乃のこより絶頂を  
而國の地よりて山乃八分目より西れりて其彼國の地なる由は  
山岳よりて而國乃嶽とほとて叔頼ハ言れり其乃小を産別ハ  
風動られを新社の西を巨岩と聚てたみ揚くる由産別室の  
内小社と造りてかくに在る四方八面中をとり古人は白根嶽ハ

男耕山乃栗院なりといひり山乃中候を悉く獲て其の概多し  
樹蔭の處に名産と稱する白根人參或は白根葵白根葉等も乃  
其の珍木多く茶葉といはるる其の葉連枝初と一枝葉一がごとく臺岳  
の葉容易に光澤するものとて由るは皆つりふは嶽の葉香といはる  
畜すみける由を形と見ることをあけきと採頂をりのおやを  
糞なりといふ拾ひ得るゆきり砂麝香あといはるるそのより味を香  
氣とすこきり實は被畜の糞あるもやを形と見ざるや阿鉢  
隨形を白根と栗白根乃間ふなり

栗山郷 十ヶ村塩谷郡あり 西川 日向 湯西川 古呂郡

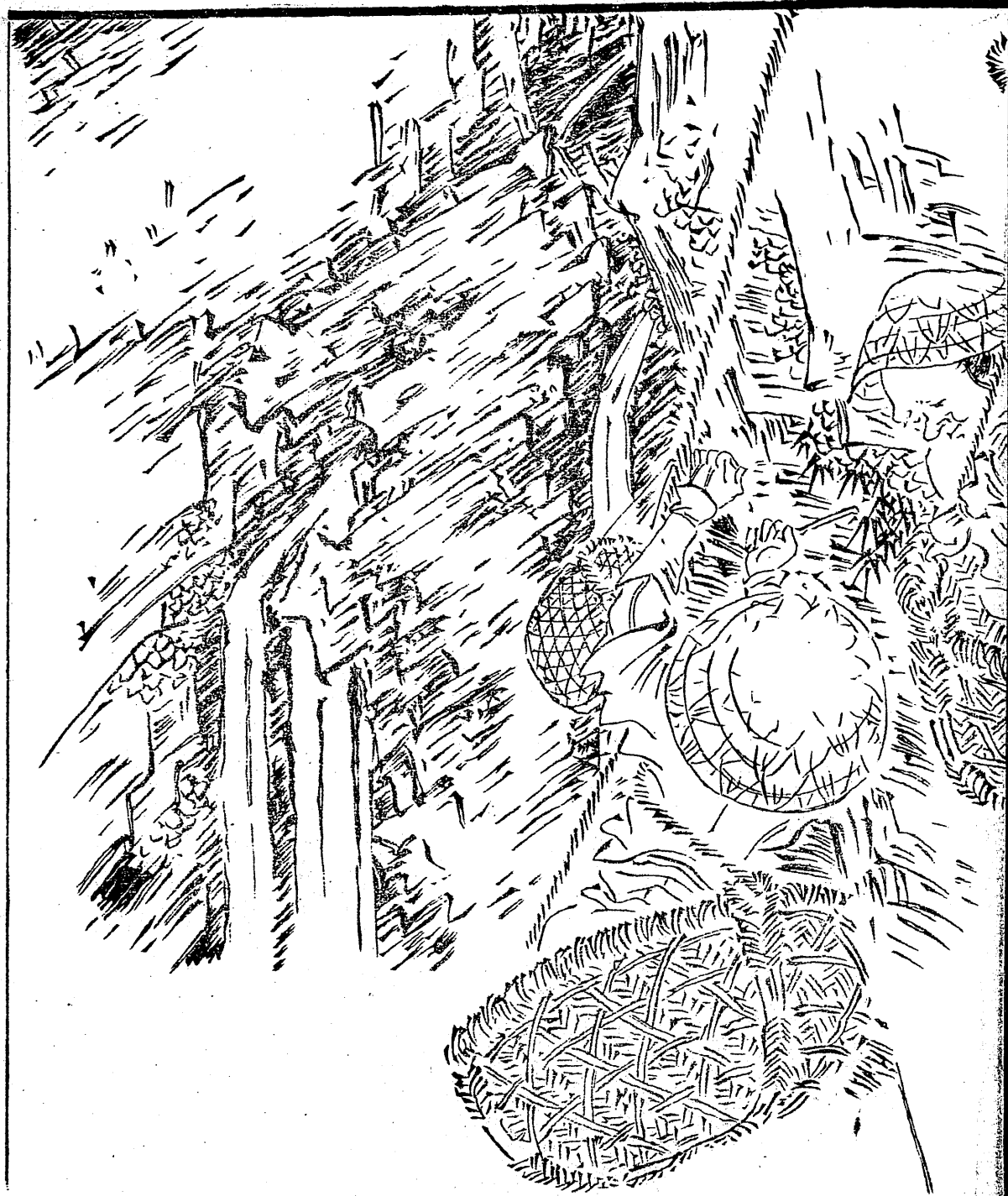
栗山 上栗山 下栗山 野門 川俣 川治等乃村くつ山内  
處より山の方如室山の山裏あり如室と男耕の畠ある處皆  
經る富士足跡といふ嶺山と踏てける村居の閑々なる年時も

處より山の中乃村居を述る處北よりを僅に栗石の間を穿  
て此處の山を登実するその少くは食一年の行あく男女とも  
山中へ入て初擡一男を尊と稱し或は喰ひ或は販ぎて山内  
峰を渉り岩薺あど擡も何り木を伐り板を擡て日光へ出はる  
路狭き極多き由を云ふ四尺ふ切る脊負ひ出て或は詰するも獲  
る北よりを山嶺崎嶇と云ふ行易なりと云ふ稲穀ふかへり  
冬を茹く居る木幹木抄り木後等伐此るを山内連來栗山摘とて  
曲物造の器と出せ是を谷門の水と汲み桶なりといふ児女も經獨  
をまといひ山へ入る妻木をとり時日経て據實栗子多き處を  
拾て食物の役とせ又栗山の長あるそのを頂をふ利つり山古  
平家の修験の山山中へ隠しあり氏を小松と稱する由されども  
家藏といはる古文書古書ありと云ふ處を主來由も定るなり



栗山深谷岩茸取

椿山外史



所々温液

板室 日光より東に約十二里  
中蔵の東より

福和田 太田

滝 滝村より日光より東の方  
約九里を流す

湯西 栗山の内湯に  
あり流す

足尾峠 昇降一里宛なり日光の方へは東に下りて細尾村へ出る

又より清滝村と通る日光の内へ至る約二里修味乃絶頂より栗店

一宇がふとあり坤れ方へ下れば清滝とて足尾に新梨子村小原迄

山村あり又の谷奥中蔵より湖水乃南の方より新梨子村へ通る

谷川清滝乃通より流る由ある南流して利根川へ灌漑するを

清滝門と称するいり道なり味の下より川と論る足尾村を二里

味より西に里なり又味より清滝小乾へ通るなり足尾近在より

中蔵より又湯元へ往するなり中蔵より一里半許より湖水乃

南岸橋を渡して中蔵より別れ道へ至る又南岸を傳ひ新赤

沼系へ出る湯元を至るなりとて先利根とてわりのみで中

蔵より湯へ婦人と浴せさせんとて成謀り許客ありを温泉も禁

業すべしと路次より上り筋より足尾峠へ掛るは道と湯元へ往來

を女牛の標制の中蔵より出ず日光町筋より清滝細尾へ

掛り足尾峠よりひたして湯元へ出たり湯元へ至るとて

そと内へ切開き利根と通るなりとて湖水の南岸を花供の人

の初よりなるなりとて清滝を初見するなり頂の法するなり

てありとてのなりとて清滝を初見するなり頂の法するなり

足尾郷 日光の内より西にあり約六里清滝とて湯元へ至る

約二里足尾十丁村と上下にありなりとて新梨子赤沢の二村と足尾

塩原 湯とて日光より東に約

荒井 太田

川俣 栗山の女観山のわきあり

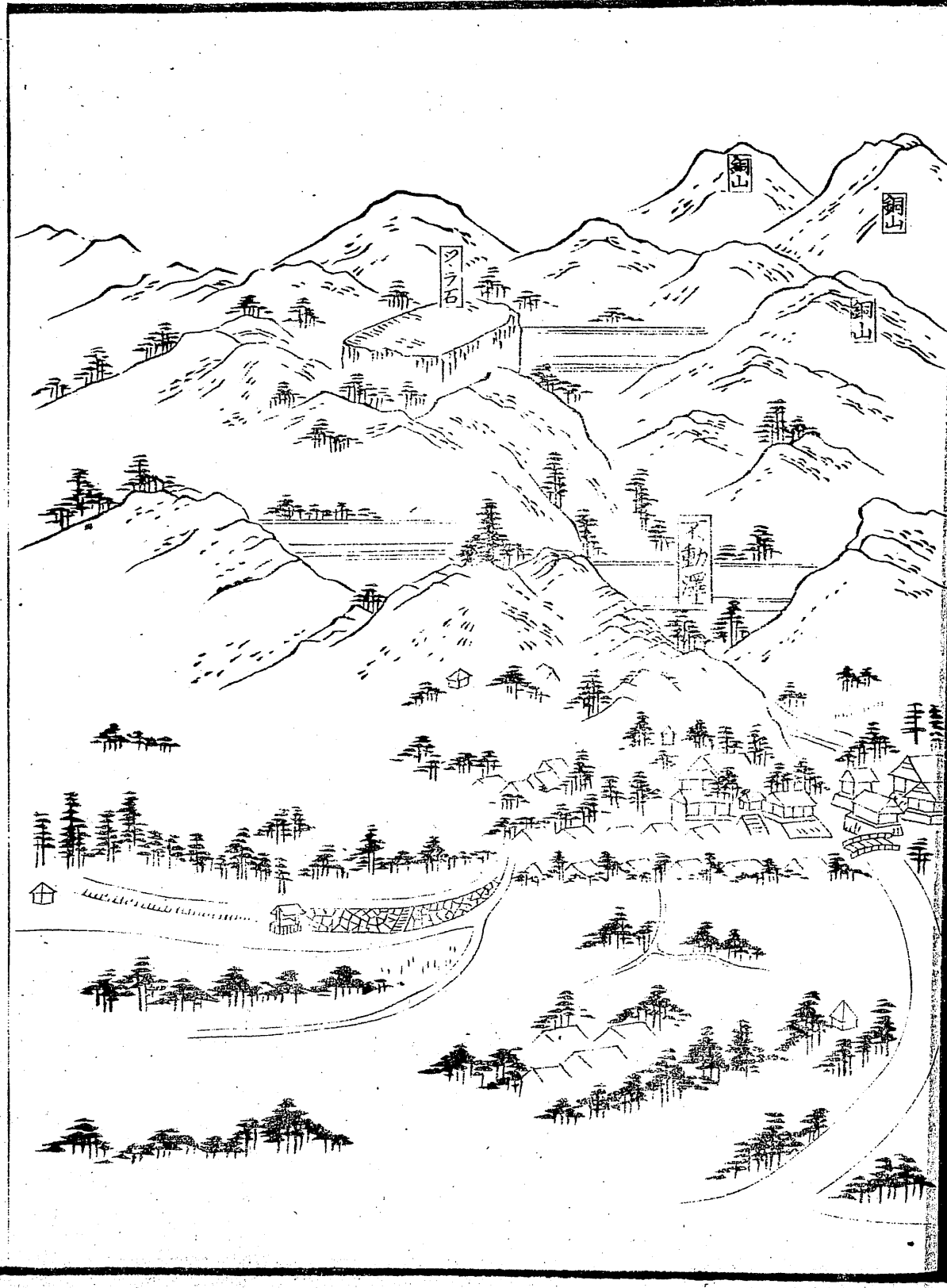
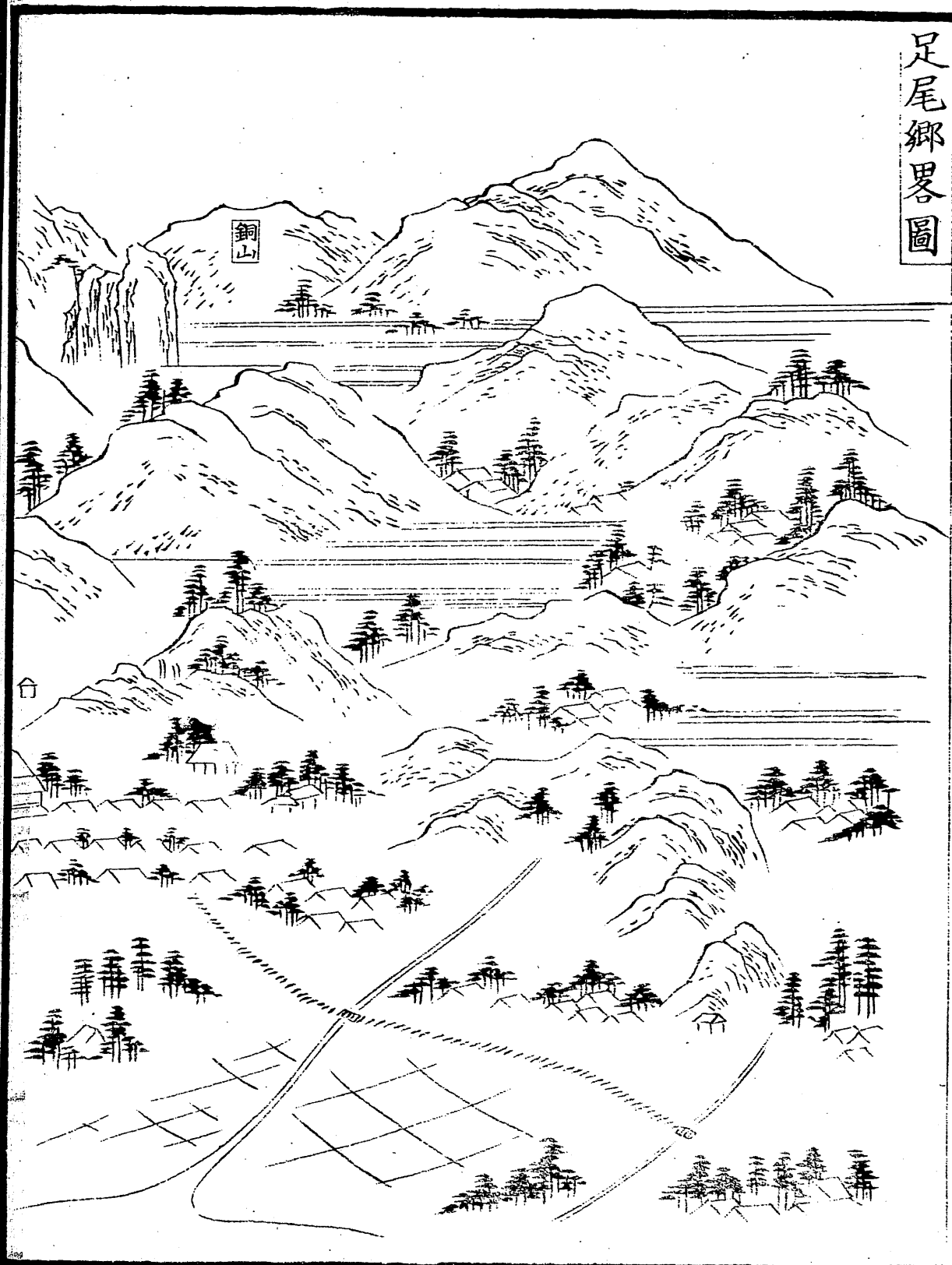
日光澤 栗山の内より二里山奥に



羽根の妻に子孫を授け  
 梅の枝を子孫に授け  
 石とを沙汰する図



足尾郷畧圖





子新乃戸教と唱へ、洞山新山の潤益所を依り、法園より来集  
て繁榮せしが、延享寛延の末より漸く衰て、今も家数も三百戸許  
村居を山谷の地、山麓小村民家居せり、二條の路を南水一途  
以るるあり、廣狭東西二里、南北一里、許そ十四ヶ村、この中を  
同友  
赤倉、久義、松本、仁田、元言、赤木、神子内、以上の村々、上分の村と  
唱ふ掛水、赤沢、新梨子、中居、を下系、竜風、以上の村々と下  
分の村と唱ふ、此より洞を出せる訳次あり、上段二里

洞山隘觴 古坑數百竅あり、此洞山の地、形を足尾、山中のま中に  
山より足尾の口、境外六里を有べし、洞山周廻九二里十八町  
六丁り、洞山を岩石より山頂は樹木生ぜず、洞山堀初たるハ、寛長  
十一年の事とて、備前國のその地へ來り、洞山あるに、城又空め、其  
以座、深院の形、所なる由、未だ下知を、ゆる堀初なるハ、沢山は洞城

堀初、同、吹洞と公廳へ奉り、以

洞三代將軍家初、洞新山を、洞山堀初、乃、堀り、由、未だ、下、知、る、洞、山、の、事、に、ま、より、洞、用、山、と、あり、貢、賦、の、事、ハ、日、光、の、支、配、  
た、れ、ど、洞、山、を、洞、代、友、乃、指、揮、と、あり、誓、支、配、一、家、保、中、新、借、法、  
下、金、皆、莫、大、の、と、な、り、又、元、文、の、初、は、洞、用、洞、乃、介、小、藩、藩、府、被、  
所、付、暫、藩、抄、吹、立、ける、中、抄、乃、裏、小、足、の、字、城、と、名、一、を、受、り、て、藩、造、  
せ、り、の、あり、を、以、來、を、洞、下、金、お、上、堡、吹、小、藩、支、より、洞、山、表、徴、  
藩、役、座、を、洞、免、と、称、ひ、結、固、窮、及、が、り、ふ、これ、も、今、も、洞、免、吹、洞、代、  
友、掛、り、より、陣、登、り、て、洞、代、在、任、ける、と、ハ、未、だ、の、如、く、南、水、洞、山、を、  
足、尾、一、條、系、乃、その、大、は、貨、殖、一、國、と、稱、ふ、と、一、時、代、所、の、新、集、  
子、村、の、洞、山、系、より、大、國、と、稱、ふ、堀、内、へ、石、碑、造、立、一、洞、山、乃、來、由、  
と、銘、一、重、なる、今、も、未、だ、の、如、く、名、寄、も、荒、蕪、一、石、碑、も、又、新、集、一、文、字、

山中銅穴圖



湖子





足尾村不動澤



知進ぶ由通時を陣屋の側小羽吹か小登曰戸お双べり  
銀山 尾町より西小何々二里餘北形田小町餘ある場あり  
粘山を日光

所門之清持山とある通り運上を有り村民家の山あり一と今ハ  
粘出づる由吹方と体く式所は司るそのを命ト重里

庚申山 芝町より西北約三里許山を自他なる奇石種  
天造の如くある形諸をなせ里近き比より山中に奇觀あり圖と

撰刻一遊説するを乃何進を古人等誘引あり或を以て此山中は  
白猿一匹を欠る由庚申山とを唱へ又ハ猿の津古とも稱せといふ

日光諸處の名産

銅 尾尾より出 銀上と同 熊膽 熊皮 尾尾より出  
蠟石 日光蠟石とて中津より細工の造る石ハ尾尾山中より  
出す今ハ上品の石極はく白き石の多し

飛禽

慈悲心鳥 山の奥より中津より又ハ栗山にすあり所内にも  
駒鳥 尾尾より出 山鶴 山鴨 岩燕 鷓鴣 尾尾より出

龍尾 龍尾にあり龍尾山にあり  
魚燕 尾尾より出

魚燕

鰻 尾尾より出 岩魚 尾尾より出 山生魚 尾尾より出

藥品

黃連 直根人參 日光人參 山生魚 尾尾より出

草木

白根葵 白根蘭 白根人參 雪割草 苦桃 岩子香

岩鏡 狸く頭 梅樨 日光蘭 石楠花

千手かんひ 夢湖乃夢 石楠花 躑躅



庚申山







